

## 高麗・懶翁恵勤禅師の念仏禅について

韓 普 光 (泰植)

### 1. 懶翁恵勤禅師の行蹟

懶翁恵勤 (1320-1376) の生存時期は、高麗が元の支配下で様々な干渉を受けていた時であった。懶翁恵勤は、当時活躍していた太古普愚 (1301～1382) とともに高麗末期の混乱な社会と墮落した仏教教団を立て直すために努力したが、儒教の新興士大夫の勢力は仏教を強く批判ばかりしていた。門人である覚宏が編纂した『懶翁和尚行狀』によれば (『韓佛全』6, pp.703～709), 高麗忠肅王 7 年 (1320) に誕生した禅師の児名は元慧, 俗姓は牙氏であり, 故郷は慶北寧海であった。そして法名は恵勤であり, 号は懶翁, あるいは江月軒とも呼んだ。20 歳のとき, 友人の死に遭遇し, 人生無常を切感して出家し, 妙寂庵の了然禅師の門下で得度した。23 歳のとき, 松巖寺で日本僧である石翁とともに法拳揚場で自悟を証明した。27 歳のときには元に入って, 燕京の法源寺で西天 108 祖として知られていた指空和尚に会い, 法を伝受した。ところで, 印度僧である指空 (1300?～1363) はすでに 1326 年に高麗で 3 年間の滞在後, 元に入ったことがあった。従って, 彼は高麗の仏教界ではすでによく知られていた善知識であった。それに, 懶翁は平山處林の門下で認可を受けたこともあり, このような事実が広く知られるにつれ, 36 歳のときには元の皇帝である順帝によって燕京の広済禅寺に滞在させられ, このときに順帝に法を説いた。

その後, 38 歳のときに指空に帰国を知らせた。すると, 指空は“高麗の三山兩水之間に留まると仏法が興行するであろう”と言った。指空の教えに従って, 帰国後には楊洲で松巖寺を建てたという。42 歳のときには, 恭愍王のお呼びを受けて神光寺に住席し, 王に説法した。44 歳のときには, 神光寺を辞退し, 九月山金剛庵・龍門山・円寂山・金剛山などで修行精進し, 51 歳のときには, 広明寺で水陸齋を執し, 工夫選を主管して僧科を施行した。そして, 指空の靈骨を奉り, 松巖寺で居住することを頼み, 工夫選を主管した。52 歳のときには, 権僧である辛

暉が処刑され、太古普愚が国師になり、懶翁は王師に奉ぜられ、王命によって松広寺に住することになった。懶翁は松広寺に住し、松広寺を‘東方第一道場’と呼称させた。55歳のときには、松巖寺の重創仏事を主管した。また、王師を辞職したが、禍王が再び王師に奉じた。五七歳のときには、松巖寺の仏事を回向し、王命によって密陽瑩原寺へ行く途中、驪州神勒寺で入寂した。

## 2. 懶翁恵勤禪師の禅思想

彼の禅思想に最も大きな影響を及ぼした人物は、印度から中国へ来た指空である。彼が元に入り、最初に訪ねた人が燕京の法源寺にいた指空であった。29歳のときに指空に会った時、彼は悟った心の境地を“山河大地眼前花 萬像森羅亦復然 自性方知元清淨 塵塵刹刹法王身”という偈頌で唱えた。これを聞いた指空は彼の見性を認可し、板首で10年間滞在するよう許諾した。しかし、懶翁は長く留まらず、再び他の善知識を求めて雲水の道を旅立った。

彼の著述として知られた『指空和尚禅要録』<sup>1)</sup>によれば、指空禅の特徴は般若思想を基本とした無心禅であると言える。指空は般若を勉強したが、それに満足せず、再び禅修行をしたと伝えられる。また、戒律と般若教学及び禅も兼修した。彼の無心禅は老荘学と習合されてできた虚無主義的、かつ中国的なものではなく、印度の般若空思想に立脚したものであった。『禅要録』では、「聞曰 以為宗 師云 以真空無相為宗」と記す。このように指空は無心と無相を般若の真空の中で求めようとしていることがわかる。懶翁は指空の無心禅継承を最も重要視し、高麗でこれを顕彰しようと努力した。1370年、51歳のときには、高麗で指空の舍利を参拝した後、1372年、53歳のときには、指空の教えに従って三山兩水之間である松巖寺の重創仏事をし、ここに指空の舍利塔を奉安した。この時に著した「入塔」には、

西天一百八代祖指空大和尚 三千威儀不顧 八萬細行那權 身上常穿渾金 口裏痛罵  
佛祖 平生氣壓諸方 鵲眼難能挿背 元朝默坐多年 感得人天打供 一朝傳語還鄉去  
八都龍天嘆不還 故我今朝誠立塔 三韓境內鎮常安 法身偏法界

と記されている<sup>2)</sup>。すなわち、指空の舍利を奉安する際に著した入塔文から、懶翁が指空の法を継承していたことが窺える。西天108祖にあたる指空の法は元でも大きく広がり、多くの弟子たちが養成されていたにもかかわらず、結局、最後には舍利とともに高麗へ戻ってきたことを物語っているのである。この他にも、指空に関する資料としては『上堂法語』、『指空和尚誕生之晨』、『入寂之辰』、『指

空和尚起骨』、『入塔』、『讃指空』など、数多くの文が残されている。これらの記述から、懶翁が指空の無心禅を広く普及させたことがわかる。

しかし、彼は指空の法のみを継承したのみではなく、中国の伝統的な禅法である臨済宗の法脈も伝承している。彼は1350年、31歳のときに指空の門下を離れ、平山處林を訪ねて行って法拳揚をし、法を伝授してもらった。平山處林は臨済宗楊岐派として及庵宗信の弟子であり、太古普愚が法を受けた石屋清瑛とは法兄弟である。従って、高麗の禅脈は中国南宗禅の中でも臨済宗楊岐派の法を受け継いでいると言えよう。彼は臨済の法孫であることを所々で明かしている。特に「普説」では、臨済宗の教えを次のように強調している<sup>3)</sup>

我臨済正宗 有甚交涉 有甚扶起 諸人切莫退屈 臨済眼横鼻直 諸人眼横鼻直 覓一絲毫異相不得 既是吾門種草 誰管是異是同 滅却正法眼藏 扶起臨済正宗 且臨済正宗 作麼生扶起 扶起三玄三要耶 四料揀四賓主四喝耶

このように、彼は自分の法脈が臨済の脈であることを明かしている。のみならず、弟子たちを指導する際にも臨済の三玄・三要・四料揀・四賓主・四喝などの方法を使っている。臨済と少しも異ならないのに、どうして臨済は悟りを得、我は得られないのかと質問しながら、接人方法を提示している。また、ここに止まらず曹洞宗の曹洞禅法も受容している。「幻菴伝写五位註頌来看因以題前」には、彼が著した歌頌として、

曹洞宗風事若何 崑崙白鷺兩交加 君臣偏正能廻互 不坐那邊是作家  
という詩が伝えられる<sup>4)</sup>。これは幻菴が写した曹洞五位註頌を見て作った詩のようである。のみならず『岳禅者伝写五位註頌因以題前』に対する詩もある。従って、彼は曹洞禅法に関しても興味を持っていたと見られる。また、法眼宗の念仏禅についても多くの関心を持って弟子たちと仏子たちを指導した。

### 3. 懶翁恵勤禪師の念仏禅

彼の念仏に對する関心は『阿弥陀經』中心の指方立相的な称名念仏と、『觀無量寿經』の觀念念仏、及び唯心淨土自性弥陀の念仏禅など、様々である。まず、称名念仏に関する資料と判断される「示李尚書」によれば、

重修寺院接方來 南北禪和去再廻 又向西心勤念佛 蓮花上品自然開  
という<sup>5)</sup>。この偈頌は七言節句の短句であるにもかかわらず、懶翁の修行方法をよく現している。前句では自分が住席していた寺院の重修後、全国から参禅修行する禅衲子たちが多く訪問するようになったことについて話している。従って、

当時の出家者たちは参禅を中心に修行していたことがわかる。しかし、後句ではこの詩の主人公である李尚に教える言葉である。すなわち、李尚が誰であるかはわからないが、恐らく知識層に属する士大夫の在家者であるようだ。彼には参禅修行ではなく、念仏法によって指導している。すなわち、西方に向かって一生懸命に南無阿弥陀仏を念ずると、上品上生することができるという。西方浄土極楽世界の阿弥陀仏に向かって念仏することを勧誘しており、それを実践すると、必ず極楽世界に往生することができるという確信を植え与えている。従って、在家者には指方立相的な称名念仏を語っていたことがわかる。

また、彼の著作として伝えられている『懶翁和尚僧元歌』では、405句の長篇歌辞を五段階に分けて人間の生涯を敘述している。ここで主語を主人公と呼びながら、人生の無常さと世俗の生きに対する執着を捨て、念仏修行することを勧誘している。その表記は新羅時代から使用された吏讀文字になっているので、庶民大衆たちに念仏信仰を高趣させるために著述されたものと見られる。ここで称名念仏を勧誘している句を紹介すれば、次のようである<sup>6)</sup>。

臨終に念仏すれば、地獄報を消滅し、極楽へ真っ直ぐ行けるであろう。一念に念仏することは、十方世界恒沙仏がみな讃歎することであり、歴代聖賢によって奉持するところである。阿弥陀仏念仏法は何によっても妨げられない。僧俗男女は勿論、有識無識貴賤の間に所業を廢止する必要なく、農夫なら農事をしながら暇な口に阿弥陀仏、織女なら織りながら暇な口に阿弥陀仏、今生に利他し、行住座臥を続ければ、後生極楽できるであろう。多ければ六字念仏、少なければ四字念仏、行住座臥し、語黙する間に、高声でも、隱念でも、大小間でも、六字四字念仏を勲力によって念仏し、悲感なときにも阿弥陀仏、いいことがあっても阿弥陀仏、暇な口に雑談せず阿弥陀仏、話し相手として念々に阿弥陀仏、時々阿弥陀仏、所々に阿弥陀仏、事々に阿弥陀仏、一生これを実践すれば極楽へ行くのは難しくないであろう。

臨終念仏法を勧誘しながら、一生休むことなく念仏することを説いている。称名念仏として‘南無阿弥陀仏’の六字念仏、あるいは‘阿弥陀仏’の四字念仏のうち、どれでも構わず、また高声念仏であろう、隱念であろう、默言念仏であろう、拘碍を受けず、念仏することを勧めている。そして、各自の生業に従事しながら、口では常に念仏することを勧誘している。のみならず、時と場所に関わらず、念仏することを勧誘している。

次に、『観無量寿經』の十六観法である観念念仏についても説いている<sup>7)</sup>。

主人公、主人公！盟誓して念仏し、釋迦世尊に勧する念佛、『十六観經』で言うに、日

没観が第一である。西山へ没していく太陽を開目・閉目の眼前に掛けておいて、阿弥陀佛大聖號を晝夜なく覺えるうち、定念が逃げ出し、雜念が急ぐと、勸勤しよう。自噴して還生しよう、懃心して世事のように愛着して日久月深に工夫しよう。

すなわち、『観無量寿經』の日没観法に関する具体的な方法を提示している。西山へ太陽が没していく姿を觀し、目を開けた時にも、また目を閉じた時にも阿弥陀仏の名号に心を集中しなさいという。定念に入ってもしばらく雜念が生ずると、また自分を自噴し、ひたすら阿弥陀仏の觀念のみに精神を集中することを勧誘している。この他に『僧元歌』でも、念仏法に関して多く説いているが、今は省略したいと思う。

次に、彼は自性弥陀唯心淨土法によって仏教人たちを指導している。特に『答妹氏書』で詳細な念仏法について説明している。これは、妹が彼に送った手紙に對する返事と推定される。六親の情を忘れられない妹に、これを断ちきってひたすら念仏修行することを勧誘している<sup>8)</sup>。

請知此意 千萬斷除親見之心 常常二六時中 着衣喫飯 語言相聞 所作所爲 於一切處 至念阿彌陀佛 持來念去 持來持去 到於不念自念之地 即能免待我之心 亦免枉被六道輪迴之苦 至囑至囑 頌曰 阿彌陀仏在何方 着得心頭切莫忘 念到念窮無念處 六門常放紫金光

すなわち、お兄さんに会いたいという氣持を断ちきって、24時間のうち、常に、服を着るときにも、ご飯を食べるときにも、仕事をするときにも、どこで何をしても、ひたすら阿弥陀仏を念ずると、無念の境地に至ることができる。すると、自分自身に對して我という執着も無くなり、六道輪迴の苦痛も免ずることができるので、頼む、また頼むのである。そして、“阿弥陀仏がどこにおられるのか、心を掴んで忘れないと、いつの間にか思いが尽き、無念所に至ると、全身から常に紫金光が生ずるであろう。”という偈頌を歌っている。このように、妹に送った手紙で、ひたすら称名念仏することによって無念念仏に至よう勧誘しながら、阿弥陀仏は心の中にいると説いている。この偈頌は唯心淨土觀を代表するものとして、今日韓国仏教の薦度儀式や仏教儀礼で幅広く愛誦されている。

また、『懶翁和尚歌頌』の「示諸念仏人」においても、自性弥陀唯心淨土について説いている。この偈頌は七言三二句になっているが、次のようである<sup>9)</sup>。

深沉無語意彌長 妙理誰能敢度量 坐臥行來無別事 心中持念最堂堂  
自性彌陀何在處 時時念念不須忘 驀然一日如忘憶 物物頭頭不覆藏  
彌陀憶念佛須聞 二六時中子細看 驀得一朝親憶着 東西不隔一毫端

人人着歩不還郷 山野殷勤又發揚 忽憶念頭俱熱處 翻天覆地覺花香  
 念念無忘憶自持 切忌求見老阿彌 一朝忽得情塵落 倒用橫拈常不離  
 阿彌陀仏在何方 着得心頭切莫忘 念到念窮無念處 六門常放紫金光  
 幾劫勞勞六道廻 今生人道最爲希 勸君早念彌陀佛 切莫閑遊失好時  
 六道輪廻何日休 思量落處實爲愁 唯憑念佛勤精進 拶透塵勞驀到頭

阿弥陀仏の無量な功德と妙理を考えてみると、限量ない。これを常に心深く留めるよう当付する。自性弥陀がどこにいるのか、常に考えて忘れてはならない。すると、突然一朝に、その思いさえも忘れると、物ごとに仕事ごとに阿弥陀仏が隠すことなく完全に現れるのであろう。阿弥陀仏を24時間の間ずっと考え、また念ずると、一朝に親見する。これが西方と東方とが違わない。西方浄土へ往かなくても、すべての山野に阿弥陀仏が顕現する。悟りの花と香りによって天地が引っくり返される、といいながら、妹に送った手紙の偈頌である阿弥陀仏在何方を添附している。従って、念仏人たちに送った文でも唯心浄土観を垣間見ることができる。

そして、永昌大君に与えた偈頌である『示永昌大君』でも、唯心浄土に関する見解を見せている<sup>10)</sup>。

一念忘時明了 彌陀不在別家郷 通身坐臥蓮華國 處處無非極樂堂

この偈頌は唯心浄土をよく表している。阿弥陀仏を呼ぶ限り、思いさえも忘れるようになる無念の境地に入ると、西方浄土が他に存在せず、この娑婆世界が他ならぬ浄土であり、行く所々がすべて極樂である。ここで重要なことは、これは無念の境地に没入して一心不乱の状態に至った時のみに可能であるということである。これは参禅の境地で話頭に没入することと違わない。この他にも、薦度儀式や靈駕法門などでも浄土思想を見つけることができるが、今は省略する。そして『西往歌』も懶翁の歌として伝えられているが、その撰者について様々な論難があるので、この問題についても別の機会に譲る。

以上、懶翁和尚の生涯と禅思想及び念仏禅について探ってみた。彼は高麗末の混乱期に生まれて、印度の指空と中国臨済宗の平山處林から禅法を伝受し、これを広めるために努力した。のみならず、浄土念仏にも多くの関心を持って弟子と信者たちを指導した。彼の念仏観は称名念仏と観念念仏、及び唯心浄土を中心として展開されている。特に、庶民大衆のために吏讀文字を使用して分かりやすい方法によって歌辞形態の歌で『僧元歌』を著わした。この歌は国文学上でも歌辞文学研究に重要な資料として残っている。そして、十六観法の観念念仏と唯心浄

土の念仏禪をもって多くの仏子たちを指導した。しかし、念仏公案法は提示していない。そして、彼の‘阿弥陀仏在何方’の偈頌は、今日韓国仏教の薦度儀禮と莊嚴念仏として必ず持頌されており、念仏禪の代表的な偈頌として広く愛誦されている。

- 
- 1) 指空撰『指空和尚禪要録』(1326 年刊, 1474 年復刊, Seoul 大学校図書館所蔵筆写本)
  - 2) 懶翁著『懶翁和尚語録』(『韓佛全』6, p.727 上)
  - 3) 上同, p.715 中
  - 4) 懶翁慧勤著『懶翁和尚歌頌』(『韓佛全』6, p.745 中)
  - 5) 慧勤著『懶翁和尚歌頌』(『韓佛全』6, p.742 中)
  - 6) 慧勤著『懶翁和尚歌頌』(『韓佛全』6, p.751 中)
  - 7) 上同, p.749 上.
  - 8) 慧勤著『懶翁和尚語録』(『韓佛全』6, 727 下)
  - 9) 慧勤著『懶翁和尚歌頌』(『韓佛全』6, 743 上)
  - 10) 上同, 742 上

〈キーワード〉 懶翁惠勤, 懶翁和尚行狀, 指空, 平山処林, 念仏禪, 唯心淨土.

(東國大學校 教授, 文学博士)

In the present paper, I examine the Meditation on the Lotus Sūtra 法華三昧, ascribed to Zhiyi 智顗 (538-597), in the *Tiantai sijiao yi* 天台四教儀 (*Tiantai Fourfold Teachings*) written by Ch'egwan 諦觀 in Korea.

The Meditation on the Lotus Sūtra is considered the Complete and Sudden Practice 円頓止觀 by Ch'egwan. It is Viewing Inconceivable Reality 觀不思議境 which is the First stage of the Ten Modes of Contemplation 十乘觀法 of the Complete Doctrine 円教.

Concerning the Viewing Repentances 懺悔觀, Ch'egwan advocated the practices of the Five Dimensions of Repentance 五悔 in the Grade of Joy from According With the Truth, the First Stage of Five Preliminary Grades of Disciples.

He placed the Repentance for Six Sense Organs 懺悔六根, Imploring 勸請, Rejoicing 隨喜, Merit-transference 廻向 and Making vows 發願, which were initiated by Zhiyi, in the Auxiliary Practices 助道行 of the Complete Doctrine.

He also advocated the Five Dimensions of Repentance from the Stage of the Five Preliminary Grades of Disciples to the Stage of Preliminary Enlightenment 等覺位. After all, he stood on the side of Method of Repentance of the One Vehicle 一乘懺悔法 of the Meditation on the Lotus Sūtra.

### 93. The Buddha-Contemplation Sōn (念佛禪) of the Master Naong Hyoegun (懶翁惠勤) in the Koryō (高麗) Period

Bo-kwang HAN

The lifetime of Master Naong Hyoegun (1320-1376) was a time of difficulty under the influence of the Yuan (元) Dynasty in China. Effort were made to repair the damage suffered by society and the Buddhist monastic community at the end of Koryō Dynasty. Neo-Confucianists strongly criticized Buddhism.

While broadly spreading Master Dhyānabhadra's (指空) No-mind Sōn (無心禪) and Master P'yōugsan Ch'ōrim's (平山處林) Linji Sōn, Master Naong had much interest in Pure Land Contemplation Sōn (淨土念佛禪) and taught



his disciples and lay Buddhists accordingly. His thoughts mainly developed focusing on reciting the names of Buddha (称名念佛), Buddha Contemplation (観念念佛), and mind of Pure Land (唯心淨土). In particular, he composed the 'Söngwōka' (僧元歌) of Kasa (歌辭), which was written in Korean language expressed in Chinese characters (I du munch'a 吏讀文字) in order for lay people to understand more easily. However, he did not present a kōan method for Buddha Contemplation Sōn (念佛公案法). His Dharma song which begins with "Where is Amita Buddha (阿彌陀佛在何方) —" is always recited in liturgical services and the grand Buddha Contemplation ritual in Korea today, and it is generally recited as a representative Dharma song of Buddha -Contemplation Sōn (念佛禪).

#### 94. On the Thoughts of the *Thousand-armed Avalokiteśvara-Sūtra* Translated by Bhagavaddharma

Ho-sung KIM

It is said that *the Thousand-armed Avalokiteśvara sūtra* translated by Bhagavaddharma could be divided into two parts: 'the original part' and 'the additional part'. The scope of this article is limited to the former, the original part. Although this *sūtra* has been known to belong to esoteric Buddhism, this original part actually shows not only esoteric Buddhist thought but also the Pureland idea and *Daśabhūmi* concepts of the *Avatamsaka sūtra*. These three kinds of Mahāyāna Buddhist thought seem to have been harmonized in this part of the *sūtra*, which influenced strongly the establishment of the 'Recitation Version' of the *Thousand-armed Avalokiteśvara sūtra* created in Korean Buddhism.

#### 95. The Reception and Development of the Pagoda in Koguryō

Choon-ho KIM

When thinking of pagodas in Koguryō, the first question that comes to mind is where the first pagoda can be found. Also, the origin of the charac-